

子どもや孫たちと行く万博 ～何度も万博に訪問したくなるのはなぜか～

弁護士知財ネット会員
弁護士 白木 裕一

1 はじめに

4月19日の研究会後の食事会で、私の前に座られた室谷和彦会員¹は、「万博1回行ったけど明日も行く」「僕が理系少年になったのも前の大阪万博がきっかけやった。」と概ねそのようなことを語られました。万博の開催日が4月13日でしたので、1週間で2回は行きすぎやなと心の中でつつこみつつつ、同時に、室谷会員の万博愛はどこから来るのかなと、先の大阪万博を経験していない私は、もやもやするばかりでピンときませんでした。

今回、私は、この執筆のお話を頂いた際に、このもやもや感をつきとめると共に読者の方に「大阪・関西万博、小中学生も楽しめそうやん。子供らや孫らを万博に連れて行こうか。」と思っていただくことが私の職責と勝手に考えました。そこで、私は、小中学生が関心や興味を持ち行ってみたくなるようなパビリオンを中心に訪問しご紹介させて頂くことにしました。

●ドローンによる出口案内



(ドローンショーの一場面)



(ドローンによる出口方角案内)

1 本誌2025年6月号44頁（大阪・関西万博見てある記・第3回）参照。

夜に万博を訪問する場合、ドローンショーや夜の水上ショー（アオと夜の虹のパレード）を見ることができます。ドローンショーについていうと、きれいで規則正しいドローンの動きにみとれていると、「EXIT EAST（東） WEST（西）」という表示が出てきます。その時は、ドローンで出口方角まで表示できるのかとそれ以上深くは考えませんでした。しかし、万博会場東口から「夢洲」駅までの道中、夢洲駅の構内、そして、電車に乗った直後の車内の混雑を見た時に、ドローンのあの表示は、「このままいると、帰りさらに混雑するけど、どうしますか。」という万博側からの愛ある問いかけであると理解しました。（訪問日にもよりますが）上記表示後に2回目の水上ショーが予定されている場合や人気のパビリオンに並んでいる場合などは、今帰るのは、もったいないと感じるのも当然だと思います。全くの私見ではありますが、万博に夜訪問する場合にはドローンによる出口方角案内のタイミングがより一層の混雑を覚悟するか否かの1つの基準になるかなと思います。

2 ルクセンブルグ館

初日、妻と長女は、朝から様々なパビリオンをまわっていたのですが、私も、夜から合流させてもらい、3人で1時間ほど並んで、ルクセンブルグ館に入りました。

ルクセンブルグ館は、3つのエリアにわかれており、1つ目のエリアは、等身大の画面に映し出されたルクセンブルグの人々が日常の生活や文化を語りかけてくれるエリアでした。2つ目のエリアでは、大きな球体に映し出される映像を通じて、ルクセンブルグの技術力の高さと環境保護への取り組みを知ることができました。

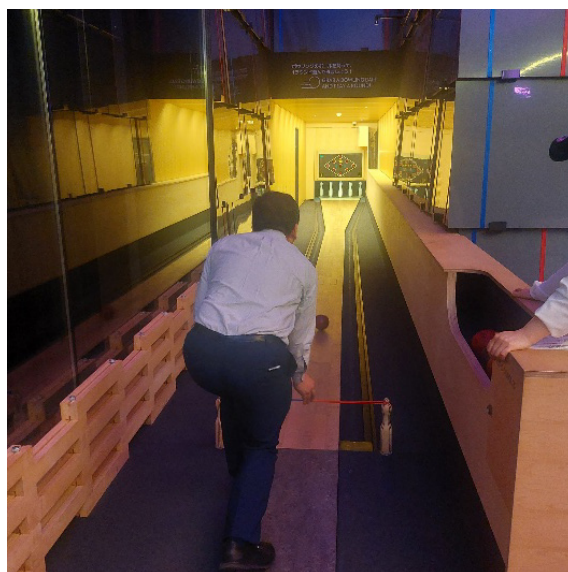
そして、個人的に、ルクセンブルグ館で一番心に残ったのが、3つ目のエリアでした。このエリアでは、大きなネットの上に座って、正面、右側面及び底面から映し出されるルクセンブルグの自然や都市の風景を観覧できるエリアでした。魔法の絨毯に乗って、ルクセンブルグの空の旅をしているような、そんな幸せな気持ちにさせるエリアでした。

その後、併設された飲食スペースで、ルクセンブルグの伝統料理を楽しもうとしたところ、時間が遅く閉店になっていました（夜の訪問は、併設したレストランが閉まっていたり、入場不可になっている場合がありますので、注意が必要かもしれません）。

併設レストランの横には、ルクセンブルグの伝統的な遊びである9ピンボーリングのレーンが設置されていました。気を取り直して、挑戦しました。何とか2投して3本ピンが残りましたが、（普段のボーリングで）ガター職人である私にとっては、十分上出来です。ルクセンブルグ館では、空の旅ができた上、9ピンボーリングまででき、お得な気持ちになりました。家族で一度ルクセンブルグに行ってみたいねと帰り道に会話が弾むパビリオンでした。



(3面からの映像とネットに座る観客)



(9ピンボーリングに取り組む筆者)

3 電力館（可能性のタマゴたち）

2日目は、まず、電力館を訪問しました。電力館では、可能性のタマゴを受け取り、プレショーを視聴した後、メインショーの1つである様々な「可能性エリア」を体験しました。

「可能性エリア」では、内容はシンプルではありますが、反射神経や運動神経をためすゲームを通じて、将来利用可能な、様々なエネルギーのしくみを学ぶことができました。制限時間の15分間で、私は、8個のエネルギーに関するゲームを楽しみましたが、下記①(振動力発電ゲーム)では、足踏みを激しく行っている最中に足がつりそうになり、年齢と普段の運動不足を痛感しました。そして、まだまだ、多くのエネルギーに関する体験ゲームが残したまま、制限時間オーバーになってしまいました(その後、電気事業連合会の万博HPを見たところ、なんと、全部で29個もエネルギーに関するゲームがあること²を知りました。)



① (振動力発電ゲームの画面)



② (直送電ゲームの画面)

2 <https://www.fepc.or.jp/sp/expo2025/about/> 参照

その後、もう一つのメインショーである「輝きエリア」に入ると、様々な体験ゲームを通じてエネルギーが蓄えられた可能性のタマゴと連動して、まばゆいばかりの光と音の大スペクタクルショーが繰りひろげられました。この映像美とエネルギー体験での頑張りが相まって、言葉で言い尽くせない、深い感動が得られました。

その日のその時間帯は、なぜか、私と年齢層に近い人ばかりでしたが、この電力館に訪れた小学生や中学生もきっと同様に感動し、将来、可能性のタマゴ（利用可能な発電や送電）を現実化してくれるのではないかと想像すると、なぜか、泣きたい気持ちになりました。

最後に、惜しみつつも、マイ「可能性のタマゴ」をベルトコンベヤーに流し、別れを告げました³。



③（輝きエリアでのまばゆい光と音のショー）

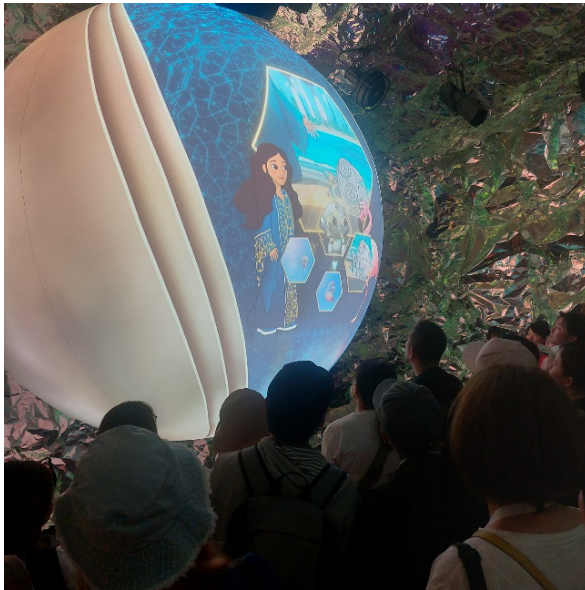


④（可能性のタマゴさんとの別れの図）

4 クウェート館

2日目には、クウェート館にも入ることができました。入場人数を調整している係員の方が、最後尾に並んでよいかの判断を行っていただきましたので、その方の動向を注視し、最後尾に並んでよしとの合図をした瞬間に、最後尾に並び、1時間ほど待って入ることができました。

3 最後の展示室では、紹介されたエネルギーの最新事情が分かり易く解説されていますので、お子さんやお孫さんたちと一緒に展示を見て頂くことをお勧めします。



(クウェートの歴史の説明をしてくれるキャラ)



(さらさらの砂の上での宝さがしゲーム)

最初の部屋では、球体の大スクリーンには、クウェートの歴史や自然環境などが映し出されました。映像場面に応じて部屋に風が吹いたり、ちょっとライトが熱かったりして、クウェートの環境を身近に感じることができました。

次に、実際の砂漠の砂を使った、砂上での宝さがしゲームも行うことができました。さそりなどの生き物もちろちろと動いたりするのを見るのも楽しいのですが、それ以上に、砂の粒子が細かくてずっと手をのせたくなるような心地良さでした。

その後、様々な展示物を見学しつつも、子供たちの人気のチューブ状の滑り台を見つけました(ここも、園児や小学生の気持ちをぐっとつかむスポットだと思います)。最後に、ドームと呼ばれるプラネタリウムに入りました。

このプラネタリウムでは、半ば、寝転んだ姿勢で天井の動画をみることができ、あたかも、砂漠で仰向きになって星空をみるという、非日常的な体験ができました。また、スタッフの方も親切でノリもよく子供にとって一生よい思い出として残るパビリオンだと感じました。

(ありきたりな感想で恐縮ですが) 子供にとっても大人にとっても、クウェートのことをもっと知りたくなる、もっと、行ってみたくなるそんなパビリオンでした。

●ミャクミャクなスイーツ



(ミャクミャクチュロス)



(ミャクミャクソフト)



(ミャクミャク焼き)

万博会場に来た以上、ミyakミyakにちなんだスイーツを食べたいと思い、2日目に、ミyakミyakチュロス⁴を、3日目にミyakミyakソフトとミyakミyak焼きを購入しました。

まず、ミyakミyakチュロス（イチゴ味）は、皮の部分のしっとりとした固さとともに、中の部分のまるで団子のようなもちもち感が強く伝わってくる、絶品チュロスでした。

一方、ミyakミyakソフト⁵は、ミyakミyak焼き（プレーン）がクリーム部分に差し込まれたソフトクリームでした。ソフトクリームについては、紫芋を使っているものを選びましたが、ミyakミyak焼きの柔らかい生地と紫芋の上品な甘さが一体となっておいしかったです（ミyakミyak焼きも、個数が入っており、食べ応えがあります。）。

いずれのスイーツもお薦めですが、ミyakミyakチュロスは、食べている最中に、輪っかが切れてしまい一部串から落ちてしまうおそれがあることにご留意頂ければ、と思います。

5 住友館（UNKNOWN FOREST）

3日目は、まず、住友館に入りました。入り口でランタン⁶が渡されるとともに、映像による説明がありました。その後は、森の中を自由に歩き回って探検できるのですが、ランタンは光ったり、私たちに、いろいろと語りかけてきました。また、光る枝にランタンをかけると、りすやきつねなどの動物たちが姿を見せてくれたり、キノコがきれいな色で発光したりと、随所に子供が喜ぶ仕掛けがありました。私も、探検の最中に隠し部屋を見つけたのですが、思わず、おーと叫んで溜息をついた後、なかなか動けませんでした。



（森と一緒に旅するランタン）

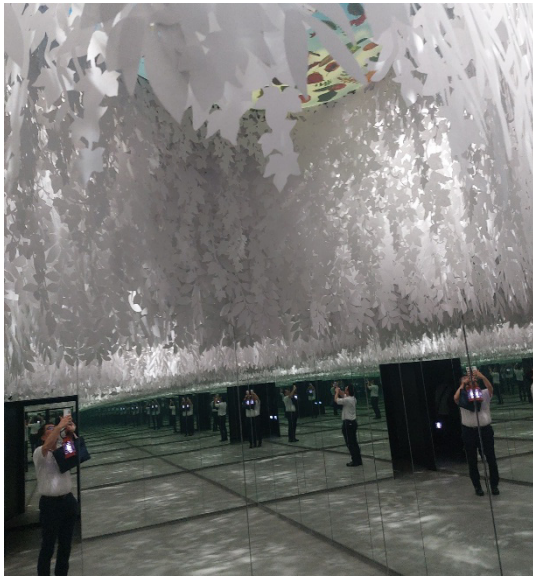


（ランタンで作動する森の動物）

4 静けさの森の未来食堂にある「Earth Sweets」という店舗で販売されています。

5 東ゲートの近くのJAPANマルシェにある「北陸お花ごっつおマルシェ」という店舗で販売されています。ミyakミyak焼きは、プレーンの他に、「五郎島金時」「チョコ」「カスタード」の味も選べます。私は、カスタードを選びました。

6 グループ毎に1つもらえるようですが、1人参加でも1つのランタンが渡されました。



(森の隠し部屋)



(ジオラマによる森の全体像の解説)

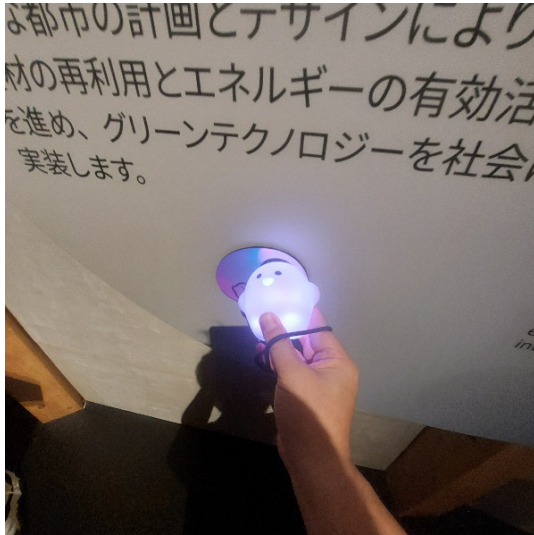
森を出た後は、霧が漂う中、ダンサーによる実演とそれに融合したシアターを見ました。うっとりするような、圧巻のパフォーマンスと映像美でした。その後、森の全体像がわかるジオラマが設置されており自分が森のどこを探検したか、答え合わせができました。

子供にも大人にも非常に人気のパビリオンであることを体験を通じて実感しました。

6 ドイツ館

最終の4日目は、まず、ドイツ館に行きました。運よく予約なしで、20分程並んで入ることができました。入館して1人1台手渡されるのが、ドイツ館のマスコット「サーキュラー」です。サーキュラーは、スピーカーの役割を果たしたり、いろんな色で光ったり、震えたりとして、私達にアナウンスしてくれます。

そして、サーキュラーは、手触りがぶによぶによしており、また、見た目もかわいいのですが、センサーに頭頂部を充てると、ドイツが取り組んでいる循環型社会の取り組みについて詳細に語ってくれます。しかも、難しいことをわかりやすく、フレンドリーな口調で語ってくれるのですが、その内容の濃さ・情報量の多さは、決してゆるくはありません。



（サーキュラーをセンサーにあてた図）



（カスタマイズして生成されるサーキュラー）



（雑草をレーザーで除去するゲームの画面）



（サーキュラーとの別れ）

その後、形状や色、模様などを選択して、サーキュラーを生成した後は、360度ぐるっと取り囲まれたシアターで、寝転んで色鮮やかな動画を見ることができました（自分が作ったサーキュラーもシアターの動画にもアップされました。）。

最後に、いろんなゲームを通じてドイツの実践している循環経済を学ぶことができるエリアを経た後、サーキュラーを返却して別れを告げるのですが、最後に、サーキュラーの「わー」と叫ぶかわいい声に癒されます。

ドイツ館も是非お子さん、お孫さんと訪問頂きたいと思いますが、小学生低学年より高学年、場合によっては、中学生・高校生の方が理解しやすいかもしれません。

7 ミャクミャクハウス

4日目の最後には、キャラクター好きを自負する私は、ミャクミャクハウスに訪問し、一緒に写真撮影をしました。デザインが決まった当初から、ミャクミャクを応援していた私としては、この万博開催後にミャクミャク人気急上昇となり、グッズも飛ぶように売れているという話を聞いてうれしくてなりません。



(ミャクミャクハウス入口)



(定刻通りハウスに登場するミャクミャク)

万博には、このミャクミャクだけではなく、本稿でも登場した「可能性のタマゴ」や「サーキュラー」、イタリア館の「イタリアちゃん」やシンガポールパビリオンの「マーリー」などたくさんのキャラクターに出会うことができます。パビリオンの入場を待っている間や万博会場を出た後の移動の際に、これらのキャラクターの権利がどのように守られているのか、お子さんやお孫さんたちとお話されてもいいかもしれません（ひょっとしたら、万博をきっかけに、知財にも興味を持つかもしれません）。

8 おわりに

私の冒頭の「もやもや」は、4日の訪問で解消されました。端的に言えば、万博に何回も行きたくなるのは、大人にとっても子供にとっても楽しく、都度新しい経験・発見があるからだと思います。

私は、冒頭、読者の方に「子どもや孫たちを万博に連れて行こうか。」とさせていただくことが私の職責であると大風呂敷を広げておきながら恐縮ですが、声を大にしてお伝えたい点は、万博会場で得られた感動は、万博会場でしか得られないという点です。だからこそ、一度訪問した方は、二度目に、二度訪問した方は、三度目に行きたくなるのが、この大阪・関西万博であると強く感じました。

読者の方の中から本稿を読んで「子どもや孫たちを万博に連れて行ってもいいかも。」といただける方が一人でもおられれば、大変光栄です。まずは、一回訪問してみませんか。

(脱稿日：令和7年7月20日)